

III-122 沖積・洪積粘性土の粒度特性及び活性について

正会員 鈴木和央

正会員 小島 肇

学 生 江騰光夫

沖積層及び洪積層は一般に軟弱地盤として扱われることが多く、土木工學上問題が多い。ここでは島根県地方に産出する沖積・洪積地盤の粒度・コンシステンシーについて実験し得られた結果のうち、特に Skempton が次式

$$A = \frac{P.I.}{C}$$

C:粘土含有量, P.I.:塑性指数, A:活性

を与えた。

活性値について、又 H.B. Seed, R.I. Woodward, B. Lungren が次式で与えた土に含まれる粘土の液性限界について報告している。

$$W_{L.L.} = \frac{C}{100} \cdot W_{c.L.L.}$$

$W_{L.L.}$: 土の液性限界 (%)

C : 粘土含有量 (%)

$W_{c.L.L.}$: 土中粘土の液性限界 (%)

A	土の分類
0.5 以下	1. Inactive
0.5 ~ 0.75	2. Inactive
0.75 ~ 1.25	3. Normal
1.25 ~ 2.00	4. Active
2.0 以上	5. Active

図 1 には縦軸に粘土含有量をとリ、横軸に L.L. 及び P.I. をとつて示された上記二式にもとづく図であるが、これらによると、宍道湖・神西湖・斐伊川各現地積土の活性は洪積時代に堆積して、ローム層の活性及び粘土の液性限界よりも高いことを示している。又、液性限界についてみると沖積土、洪積土大差はないが、粘土含有量がローム層は異常に高いために塑性指数が非常に高い結果が得られている。なほその他結果の詳細については紙面の都合上当り発表したい。

